魔法オッサン
リリカルあらたか

魔法オッサンリリカルあらたか

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19766272

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, もぶおじさん×霊幻, ♡喘ぎ, 濁点喘ぎ, 女装

Kさんからリクエストいただいた小説です🌸諸事情で下げる場合がありますので、ご了承ください💦
（支部：user/8999142）
（Twitter：KnovelcomicCo）
悪役エクボ×魔法少年？霊幻の大人向け小説です！
もぶおじさん×霊幻、♡喘ぎ、濁点喘ぎを含みます。お好きな方はお付き合いください〜！

魔法オッサンリリカルあらたか

「私と契約して魔法少年になってよ！」
やたらハイテンションに女子高生に話しかけられて、霊幻はさりげなく中学生たちを庇いながらそそくさと目を逸らしてその場から立ち去ろうとした。
「ちょいちょいちょーい！待てやゴルァ！！こんな可愛いマスコットが話しかけてきてるのにガン無視は無いんじゃない！？」
「マス……コット……？あ、やべ反応しちゃった」
その女子高生はどこからどう見ても、知り合いのトメだった。
「トメちゃん何してんの？また新しい何かにハマってんの？」
「私はトメちゃんじゃないわ！他人の空似よ！」
「いや何処からどう見てもトメちゃんでしょ……」
霊幻はさりげなくトメから距離を取っていく。
「私は魔法の国サツバーツから来た妖精なの。サツバーツの戦乱の渦を制して征服した、魔王トーイチローがこの調味市に攻め込んで来てるのを追ってきたの！」
「いや全然変わりないが」
「調味市だけ花粉が多くなったりとか、そんな侵略をされてるのよ！？」
「地味迷惑……！」
「トーイチローはこの世界も征服するつもりなの……お願い、選ばれし４人の子供たち、力を貸して！」
「「「「えっ」」」」
たまたま相談所を手伝いに来ていた茂夫、律、花沢、将がきょとんとした。
「トーイチローは強力な超能力者……対抗するには同じ超能力者が必要なの！」
「……そう言うことなら……」
茂夫たちはトメが差し出す変身ステッキを恐る恐る受け取ろうとする。
「いやちょっと待て。契約書は？」

「けいやくしょ」
霊幻に言われてトメはきょとんとする。
「お前と契約して魔法少年になるっつったよな？じゃあ当然契約書があるだろ」
「ちょ、ちょっと待ってね☆」
トメは携帯で何処かに電話をかける。
「あります、契約書。コレです」
ぽん、と空中に分厚い紙の束が現れる。
霊幻は凄い勢いでその契約書を読み込んでいった。
「生命の保証は無いとか書いてあるんだが」
「そ、そりゃあ魔法界と調味市との戦争ですので……」
「死亡時の補償は？」
「ちょっと待ってください」
トメはまた電話をかける。
「７回までは奇跡のパワーで蘇生できます」
「じゃあ６回死んだら引退させろ。書き足せ」
「わ、分かりました」
契約書を読む霊幻の顔がどんどん険しくなっていく。
「……おい、これはほぼ人身売買じゃないのか？」
「そ、そんなことはないです！彼ら魔法少年は正義の為に闘うだけで……！！」
「給料は？福利厚生は？」
「あ、あう、ちょっと待ってください……」
トメは携帯でまた電話する。
「給料は砂金でどうでしょうか？倒した敵の数の歩合制で」
「ダメだ出勤時間制にしろ」
「わ、分かりました。福利厚生ですが、魔法の力で一瞬で傷も病気も治します。あと魔法の国観光無料です。休みは週休2日で、その間は魔法の国のレジスタンスがトーイチロー率いるアクリョーズを牽制します」
うーん、と霊幻はまだ納得してない顔をしている。
「まだ何かあるんですか……」
「いや、こんな軍事作戦を子供だけでさせるのはおかしいだろ。司

令官……保護者は？」
「……それは……」
「用意できねぇんだな？……よし分かった。俺も魔法少年になる」
「は！？」
トメが目をひん剥く。
「契約書には年齢制限は無かった。成れねぇことはないんだろ？」
「いやでも前代未聞ですよ！？どんな事故が起こるか……！！」
「その辺はそっちでなんとかしろ」
「そ、そんなぁ……」
トメはしぶしぶ霊幻に変身ステッキを渡す。
「ちょっとずつデザインが違うんですね」
茂夫がステッキを見ながら感心したように言う。
鞘におさまった飾り短剣のような形をした茂夫の変身ステッキは、柄の部分に大きな宝石が嵌め込まれている。
ステッキ自体の色も、柄の宝石も各人色が違った。
茂夫は白い短剣に、鞘には金色のグロリオサ（勇敢）の花の彫りが控えめに入っている。柄にはダイヤモンドが嵌っていた。
律は黒い短剣に、金色のアセビ（献身）の花の彫り。柄には朝焼けの遊色が煌めくブラックオパールが嵌っている。
花沢はマットな金色の短剣に白銀色の沈丁花（努力）の彫りが入っていた。柄には虎の目の瞳孔を思わせる煌めく光の筋が入った、大きな猫睛石が嵌め込まれていた。
将は渋い茜色の短剣に金粉の混ざった黒い梅花（忍耐）の彫りがされていた。柄には大粒のルビーが嵌め込まれている。
そして、霊幻のステッキは。
先端がハートマークになっている、小さな杖であった。
上に小さなティアラのついたハートマークの中には、輝く黄色のスワロフスキーが嵌め込まれている。
レモンイエローの柄にはゼラニウム（偽り、詭計）の白い彫りが入っていた。
「……俺のだけなんか違くね？」
「何しろイレギュラーですから……あっ、早速発見しましたよ！アクリョーズ四天王、エクボーです！人々を洗脳して無血開城を目指

す悪いヤツです！！」
「そりゃまた中々平和的な……」
「みんな、変身よ！ステッキを掲げて私に続いてちょうだい！」
ざ、と全員ステッキを掲げる。
「軍神アレスもご照覧あれ！」
「「「「「軍神アレスもご照覧あれ……？」」」」」
「怒りよ我に力を寄越せ！ウラミハラサデオクベキカ！！」
「「「「「怒りよ我に力を寄越せ……？恨みはらさでおくべきか……？？？」」」」」
カッ、と霊幻たちは光に包まれた。
少年たちは服が軍服のような、アイドルのようなものにそれぞれのステッキのカラーに変わっていく。
腰にはヒップスカーフが巻かれ、凛々しい姿になった。
一方、霊幻は一旦完全に裸になった。
「いや何で！？！？」
「大丈夫、謎の光で肝心なところは見えませんから！！」
レモンイエローの光の帯が霊幻の足を包み、可愛らしいリボンの付いた白いブーツに変わる。すね毛はキャストオフされた。と言うか髪の毛とまつ毛以外の毛がキャストオフされた。
「これ元に戻るんだろうな！？」
「変身が解ければ大丈夫ですよ」
際どいブーメランパンツの上に、パニエと白いスカートが現れる。スカートの縁には黄色いラインが入っていった。
デコルテが大きく開いたふわふわとした生地の白いキャミソールが装着され、キャミソールの胸元に控えめに黄色いリボンが縫い付けられる。パフ・スリーブの袖には、ぐるりと黄色のリボンがあしらわれていく。
首にはリボン付きのフリルのチョーカー。
手首までの手袋は袖口がレースになっていて、そこにも黄色のリボン。
そして髪には、大きな黄色のリボンがその紐をポニーテールのように靡かせていた。
「キッッッツ」

「大丈夫よキュアアラタカ、似合ってるわ！」
「嘘つけっていうかなんかめちゃくちゃなこと言ってないかお前！？」
ともかく、敵である。
「笑え笑え！笑うカドには福来たるんだよ、ははははっ！！」
黒いローブに笑顔の仮面の禍々しいオーラを放つ不審者が、手当たり次第に催眠をかけていた。
「ありゃあダメだな、確かに。通報するか」
「ちょいちょいちょーい！！」
携帯を取り出した霊幻をトメが止める。
「アクリョーズには国家の犬は無力です！あなた方の愛と勇気と詭弁の力しか敵いません！」
「何か変なの混じってたが」
「ともかく、決め台詞をお願いします！！」
ざっ、と５人は踵を鳴らして直立し、右手を上げて敬礼する。
「「「「「軍に変わって、粛正だ！」」」」」
もはや誰も突っ込まなかった。
「ちっ、レジスタンスの回し者ですか。……しつけぇ奴らだぜ」
「エクボー、貴方の悪事もこれまでよ！このリリカル・少年たちがあなたを惨殺するわ！！」
「ちょいちょい物騒だし、なんつーか統一しろ」
「はなっから暴力に訴えるなんて野蛮ですねぇ」
「ほら見ろ！敵に正論かまされる羽目になった！」
「信者のみなさーん！笑ってますかー！！」

ウフフヘヒヒフハハあははクククゲラゲラゲラフヒヒヘヘヘアハハハハハハハハハハハハハハハハ！！

異常に笑い続ける人々に霊幻たちはゾクっと恐怖をおぼえる。
「ほおらみんな笑ってて幸せなのに、あなた方は私を倒してどうしようっていうんです？」
「馬鹿野郎、幸せってのはな、」
「誰かの涙で出来ているのよ！」

「ちょっとトメちゃん黙っててくれる！？無理矢理笑わされて成れる幸せなんてまがいものでしかねーよ！！」
ドゥン！！
エクボーはダメージを受けた。
「くっ……詭弁の力か……！！」
「いや物凄く失礼じゃね！？」
「倒すしか無いようだな、アラタカファイブ……！！」
「頼むから統一してくれる！？くっ、ガキどもに手は出させるかよ！」
「いけ、信者ども！！連中を無理矢理笑わせて洗脳してしまえ！！」
「「「イ/キ──！！」」」
「そこも統一しとけ！！」
洗脳された人々が中学生をかばった霊幻に殺到し、

くすぐりだした。

「えっ？うひゃひゃひゃ、あはっ、やめっ、あははは！！！！」
無数の手にくすぐられてビクンビクンと霊幻は身悶える。黄色いリボンがシャラシャラと揺れた。
「今だ！」
エクボーは仮面を外し、その片耳が一部欠けたコワモテの瞳から催眠を霊幻にかけようとした。
だが魔法オッサンである霊幻のコスチュームが、邪悪な力を跳ね返す。
エクボーは舌打ちした。
「コスチュームが邪魔だな……お前ら、コスチュームを破壊しろ」
「ふぇっ！？」
霊幻をくすぐっていた１人がぐっとキャミソールを掴み、ビリッと破いた。
「は、あ！？」
ピンクの乳首がポロリする。
はっとしてトメちゃんが手をかざして『リンリー！』と叫んだ。

「ここから先は１８禁です！！マジカル☆少年たちは異空間に保護しました！！」
「俺も保護しろよそこはよぉ！？！？ゃ、あっ！？」
信者たちのくすぐる手が、霊幻の乳首をかすめた。
「ぁあっ」
甘やかな声を上げた霊幻に、エクボーは、ほう、と愉快そうな音を漏らした。
「中々いい見ものじゃねぇか」
「悪趣味ー！！……っや、そこっ、さわるな、ぁ……っ、」
信者たちの手がわき腹を撫で、持ち上げた足の付け根をくすぐる。
「ハァハァ……アラタカきゅん可愛いね……」
「なんか正気に戻った上で正気を無くしてるヤツいないか！？こらー！さわるな、ってば、ぁっ！」
ビリビリと可愛らしいコスチュームは無惨に破り散らされ、スカートもパニエも裂かれてめちゃくちゃにスリットを入れられていた。
「やだぁ……、あ、ぅ……は、ぁんっ！」
無数の手にくすぐられて、身を捩って霊幻は逃げようとする。
「ひ、ぃっ！」
こちょこちょ。
ブーメランパンツの中心をくすぐられて、びくんと霊幻が目を見開いて跳ねた。
「や、やば、ヤバいって！おいトメちゃん、何か無いのか！必殺技とか！！」
「えーっと、ミンキーアラタカの必殺技は……『ホワイト・ライアー』ですね！」
「早く言え！……っ、『ホワイト！」
バッと霊幻が手を掲げると、
ブゥンと電子音を立てて無数の光り輝くマイクが空中に浮かぶ。
「ライアーっっ！！！！』」
「しまっ……！」
マイクがエクボーに向かって投擲された。
「ギャアアアア！！」
エクボーは多数のマイクに撃たれて沈黙した。

「あれ……？なんで俺、こんなこと……」
「なんでこんなところに……？」
「アラタカくんペロペロ」
「必殺不審者投げ！」
約１名をぶん投げ、とりあえず元信者たちから解放された霊幻はやれやれと一息ついた。
「トメちゃん、警察呼んでこいつを逮捕してもらっ……トメちゃん？」
エクボーを拘束しながらトメちゃんに声をかけると、トメちゃんは目を逸らした。
「……デラレナイ・ヘヤー！」
トメが呪文を唱えると、霊幻とエクボー、そしてトメはベッドといかがわしい道具の揃った真っ白な部屋に移動した。
「うーん……なんだ、こりゃ」
エクボーが意識を取り戻す。
「クリィミーアラタカ……すごく言いづらいんだけど、貴方の変身はとてもイレギュラーだから、条件を満たさないと変身が解けないの」
「へ？」
「せいなる液体を体内に注がれないと、ずっとそのままよ」
「は？」
見ると、破かれていたコスチュームはすっかり元に戻っていた。
つまりこのコスチュームは。
脱ごうが破こうがそのままということである。
「ちょっ……風呂とかは！？」
「そのまま浴びてもらうことになるわね……」
「冗談じゃない！早くそのせいなる液体とやらをくれ！」
トメちゃんは黙ってエクボーの股間を指差す。
「せいなる……えきたい」
「せい……えき……？」
ふざけんな、と叫び声が響いた。
「まぁまぁまぁニィちゃん、ここは観念してヤられとけや。魔法少年？のペナルティみたいなもんだと思って」

「異世界の軍事行動に巻き込まれた上に処女まで散らされてたまるか！他に方法は無いのかよ！」
へぇ、初物か、とエクボーは舌舐めずりする。
「そこに無ければ無いですね」
「冷たい！……え、何？なんで俺押し倒されてるの？？」
エクボーは器用に霊幻をベッドに誘導して押し倒していた。
「優しくしてやるよ。さっき信者にイタズラされてたアンタは中々に上等だったぜ？」
ごり、とエクボーの怒張を服越しに擦り付けられて、ひっと霊幻は悲鳴を上げた。
「こんな……誰か、助けて……っ」
「助けるのはお前の仕事だろ？あー、俺様負けちまったから逆らえないなー、仕方なくぶち犯してやるぜ」
「いい！やらなくていい！！」
「そうよ、言うことを聞きなさい、エクボー。じゃあ、後はよろしく」
「トメちゃん！？」
シュンとトメは消える。
「おー、よろしくやってやるよ」
「やだっ、あ！？」
エクボーがぐいっとキャミソールの襟を下に引いて、露出させた乳首をベロリと舐めた。
「ぁ、あ……やだ、そんなとこ……やぁんっ！」
「嫌だって声じゃ無いんだよなぁ……？」
霊幻は赤面する。最近忙しくてシコるのもご無沙汰だったせいで、実は溜まっていたのだ。
「ゃあ……あっ、あっ、あ、ア！？」
ブーメランパンツの上からツン、と陰茎を突かれて霊幻はギクリと身体をこわばらせた。
「そこはダメ……さわる、なァっ！」
「それ、『そこが弱点です』って言ってるようなモンだぜ？」
ごしゅ、と先走りを滲ませたブーメランパンツをエクボーは擦り上げた。

「あぁああぁあっ♡」
ぎり、と霊幻は横顔を枕に押し付けてシーツを握った。
「ほれほれ、きもちーな？」
「やだぁっ♡やめっ♡んんんんっ♡」
ぐちゅっ、ぬちゅっ、と霊幻の性器が哀れにも倒したはずの敵にもてあそばれて下着から先端をはみ出さされる。
「脱がしても元に戻るなら、ズラして挿れるしかないか」
「は、ぁあっ！？」
ローションを絡めた指を、パンツを脱がさずアナルに挿入されて、霊幻の顎が天を向く。
「ぁあっ……やだぁっ……」
「ん、もう２本入るな。魔法の力か、それとも、お前さんにケツの才能があるのか……」
にやっとエクボーは意地悪そうに笑う。
「どっちだろうな？」
「あ、あァっ！？」
エクボーがぐりっと指を曲げて内部をゆっくり擦ると、霊幻の身体が跳ねた。
「そこ、おっ♡♡」
「才能があった方だったか」
ひっ、あぅっ、と未知の快感に翻弄される霊幻は思わずエクボーにすがる。
「やだぁっ♡きもちいいっ♡♡」
「……もっと気持ち良くしてやろうな？」
もう指が３本入る。
エクボーはごくりと生唾を飲んで、逸物を服から取り出した。
「あ……っ」
「処女喪失の瞬間だ。よーく見とけよ？」
ズブ、と太いカリ首が肉輪を割り広げる。
「あ、あぁああっ！」
「苦しいか？背中に爪立ててろ」
言われるままに霊幻はエクボーに抱き付く。
可愛らしいこった、とエクボーはほくそ笑んだ。

「……全部挿れるぞ。頑張れよ」
「ひ、ぃっ！？」
ズズズズズ、と快楽の塊に奥まで侵入されて、霊幻の目の前に星が飛んだ。
「ぎもぢいいっ♡♡ぎもぢいいよぉっ♡♡」
「そりゃあ、何より、っ！」
エクボーは押し込んだ腰をぐりっとひねって奥をこねる。
「んあああああああっ♡♡♡♡」
「奥が好きか？」
必死にぶんぶんと霊幻は頷く。
「好きぃっ♡♡奥好きいぃっ♡♡♡♡」
どき、とエクボーの心臓が跳ねた。
「……お前さん、恋人は？」
「いっ♡いないっ♡♡」
「へぇ……」
エクボーの機嫌が良くなる。ご褒美とばかりにトントンと前立腺を亀頭で責めてやった。
「それっ♡ヤバいっ♡」
「お前さん本当に才能あるなあ」
「〜〜〜〜っ♡♡♡♡」
内部がきゅんきゅんと締まる。
「メスイキしたのかよ」
「わ、かん、なぁ……っ♡」
はひ、と潤んだ瞳で切なそうに見つめてくる霊幻に、思わずエクボーは口付けた。
「んぅ……ん……いま、イってう、からぁ……っ♡」
「トばしてやるよ」
「ひ、ンっ！？」
絶頂にまだ引き攣る内部を、激しくズチュッグチュッとピストンされて、ぎゅっと霊幻はエクボーに爪を立てる。
「やらやらやらぁっ♡♡♡すごっ♡すごいの、くるぅ……っ♡♡♡♡」
ひうっ、と霊幻は息を吸い込んで。

「あぁあああああぁあアァアアッ♡♡♡♡」
びゅるるるる、と胸までコスチュームを汚した。
「くっ、出すぞ……！」
ぐっ、と腰を引き寄せてエクボーはぶるりと精液を霊幻に注ぎ込む。
「あ……あ……」
うっとりと霊幻はエクボーを抱きしめて、その精液の熱さに舌舐めずりした。
「ありがと……ございますぅ……♡」
「いや何だそれエッロ」
エクボーが名残惜しそうに逸物を引き抜くと、シュウウと煙を上げてコスチュームはグレースーツに変わった。
部屋も元の世界に戻る。
「じゃあ俺様はこれで」
「あっ！！待て、ぇっ！？」
逃げるエクボーを追おうとしてかくんと霊幻の腰が抜けた。
「ハジメテなんだから無理すんなよ。じゃあな」
「このやろ……んっ……」
何とか立ち上がった霊幻の後ろからドロリとエクボーの精液があふれて、思わず霊幻は涙目になった。
「……おぼえてろよー！！」
何故か勝ったはずの魔法オッサンは、負け犬の遠吠えをした。

※

トーイチローの城にて。
「やはりレジスタンスが現れたか……」
「トーイチロー様、奴らはこのエクボーにお任せください」
「そうか、じゃあ……いややたらツヤツヤしてるなお前？」
「気にしないで下さい」
これからのことを思ってニヤニヤとエクボーは笑っていた。

次回、

茂夫「エクボ、ちょっと話があるんだけど」

また観てくれよな！

続……かない！笑